

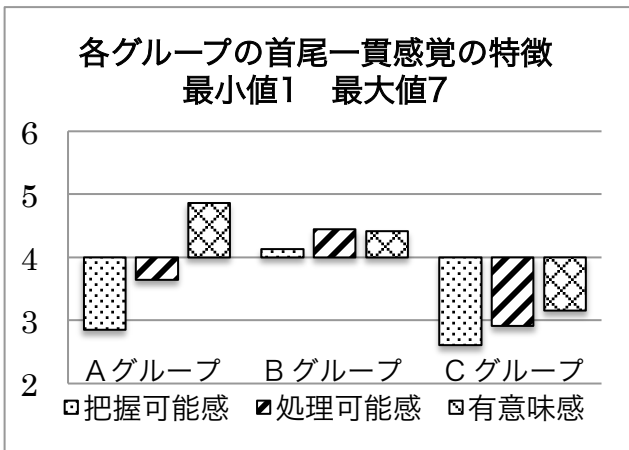
日常の感じ方に関する調査についてのお礼とご報告

大阪大学大学院 人間科学研究科 教育コミュニケーション学研究室 磯和 壮太郎

先日は調査にご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。本調査の目的のひとつに、「人生のさまざまな側面に関する捉え方の違い」によって、「日常の感じ方」(＝主観的な幸福感や抑うつ感)に違いがあるかどうかを検討することがございます。本日はその点について、調査にご協力をいただいた皆様にご報告をさせていただきたく存じます。

人生のさまざまな側面に関する捉え方について

本調査では、人生のさまざまな側面に関する捉え方を測るために、首尾一貫感覚 (sense of coherence : SOC) と呼ばれる概念を用いています。この概念は、「その人に浸みわたった、ダイナミックではあるが持続する確信の感覚によって表現される世界〔生活世界〕規模の志向性のこと」と、定義され、「自分の内外で生じる環境刺激は秩序づけられた、予測と説明が可能である、という確信」を意味する①把握可能感、「その刺激がもたらす要求に対応するための資源はいつでも得られるという確信」を意味する②処理可能感、「そうした要求は挑戦であり、心身を投入しかかわるに値するという確信」を意味する③有意味感の3つの要素から構成されています (アントノフスキー, 1987 山崎・吉井監訳, 2001)。



この①把握可能感・②処理可能感・③有意味感の3つの側面の捉え方に関する大学生の特徴について整理した結果、大きく次の3つのグループに分類できる可能性があることがわかりました。

Aグループは、(特に) 把握可能感・処理可能感は低めであるが、有意味感が高いため、「有意味高群」としました (53人)。Bグループは、どの要素も中点よりも高めであり、「平均群」としました (58人)。Cグループは、どの要素も低いため、「全低群」としました (45人)。

日常の感じ方について

日常の感じ方として、主観的幸福感と抑うつ感を用いました。首尾一貫感覚の特徴によって、この2つの得点に違いがあるかどうかを調べた結果、左図のようになりました。このことから、首尾一貫感覚は高いほうが抑うつ感が低く、幸福感が高い傾向にあること、有意味感高群よりも平均群のほうが抑うつ感が低いことから、首尾一貫感覚の得点にばらつきがあるよりも、どれも同程度持ち合わせているほうが抑うつ感を感じない可能性があることがわかりました。

引き続き、研究を進めていきます。ご協力いただきありがとうございました。

